

天正狂言本補考

田口和夫

『文学・語学』第二二八号に一九八九年の能・狂言関係の研究展望を書いたとき、狂言

研究史上まず話題となる天正狂言本について、さまざまな研究が蓄積されてきた現在、それを踏まえた天正狂言本研究史が書かれ、その内容についてもあらたに見直さるべき段階になっていると思った。そこで原本を見直すことから始めたいと考え、調査してみた。

まず、書誌的な問題について報告しよう。

古く、「国語と国文学」昭和十五年十一月号に笹野堅氏が「能狂言の成型」という論でこれを紹介されたなかに概略の書誌があり、次いで表章氏の「『天正狂言本』解説」(朝日古典全書『狂言集』下、のち『能楽史新考(一)』所収)に詳細なものがある。今回確かめたことから二つばかり気付いたことを記しておきたい。

その一は、寸法である。表氏解説では縦一六・三糎、横二五・一糎とされているが、実は横二一・三糎である。笹野氏論では縦五寸

四分横七寸ばかりとあるので正しい。表氏のものとは何かの間違いであろう。

その二は、第一葉表に比較的大きな文字がまとまった字数で書かれ、これをこすり消した跡が認められることである。まだかすかに字形を判別できそうなところ、例えば左下の

「れ」字らしきものもあり、工夫すれば読めそうに思われる。おそらくこれは本文ではなく所持者の書き入れであつたらう。架蔵の延宝忠政本もこの位置に「花の色にそめし袂のおしけれハ衣かへうきけふにもある□」という有名な和歌と「善行寺片町 寺嶋氏」という地名人名を記し、このことによつて、この本が米沢伝来のものという確証が得られている。天正狂言本のこの書き入れから所持者の手掛かりがつかめれば、今まで推測するしかなかった由来について一歩を進めることもありえよう。努力してみたいと思う。ついでのことながら、延宝忠政本は第一丁オが如上の和歌等の書き入れ、終丁ウに「文政九年霜月

吉日」という年記とその戯書、ならびに花押多数が記される。天正狂言本にも終丁ウに年記とその戯書、ならびに「正久」花押とその戯書らしい花押三個がある。第一丁オがもし和歌の散し書ならよく似ていることになる。おそらくは偶然の一致であろうが気になる所である。

このほか、表氏が触れられた、落書まじりの奥書・誤字の訂正の仕方なども、なお考える必要があり、また墨色の異なる書き入れや濁点についてもこまかく注意してみたいが、これは別稿による。

内容的には、まだまだ考えてみなくてはならないことが多い。表現をきちんと読んで不足なく舞台を復元し、それと近世の狂言との距離を測定して、中世の狂言の実態にせまらなければならない。

例えば、私自身は何度も考察したことがあるハカきくい山ふし▽についてみよう。まず、原文のまま引く。

一 山ふし一人大ミね帰りとしてひたるきとてかきの木へのほりくふ

又二人出て山ふしをたます大き

なとひかかゆふ山ふしうれしかり

ていろくの身なりするとて落

る二人の者手はたきしてわらふむねんかりていのるしりしさり

にいのりつけられる、うふつて  
帰る後なけるとめ

四行目下、「かり」は行末に添えて小さく  
書くが、はじめ「かて」と書いて、その上に  
重ねて濃く「かり」を書いている。そして右  
にある「し」字も濃く塗りなおしている。濁  
点は付けていない。

近世の諸本で柿主として一人登場するアド  
は、ここでは二人登場している。山伏をいよいよ  
飛ばせようとするとき、現行の演出でも、  
「飛ばうぞよ」「飛びさうな」と呼びかける  
掛け合いの囃し詞が唱えられるが、これはアド  
が二人であった痕跡と考えられるので、も  
と二人であったものが、近世の諸本では一人  
に整理されたのだと考えてよいだろう。こう  
いう登場人物の整理は、同時にその人物の性  
格の変化をともなうことが多い。この場合も、  
二人であった時は柿主ではなかったと見るこ  
とができる。このことは「柿の木」がどうい  
う柿の木であったかという事とかかわりがあ  
る。近世の諸本では作物の出来具合を見回り  
に来たアドが柿が熟したら取らせようとい  
うので、作物的な位置にある。天理本で「園の  
柿」といっているのがそういう方向であろう。  
天正狂言本の柿の木は果樹園ではなく、路傍  
の柿の木であるように見える。柿主だと耕作  
人の類である。生活感はより濃くなるであら

う。天正狂言本の二人にはそういう生活感  
感じられない。まとめると、二人が登場して  
来る場面は次のようなことになろうか。

京童のないたずら好きの二人の通行人が  
道を通っていると、路傍の柿の木に上っ  
て柿を食べている山伏を見つけ、相談し  
て山伏をだますことになる。

大峰帰りの山伏が柿の木に上って柿を食う  
ということの素材に『宇治拾遺物語』第三十  
二「柿の木に仏現ずる事」があり、その基盤  
に「成らぬ柿の木に神がつく」という信仰が  
あった事については、すでに論じたことがあ  
る。成らぬ柿の木の上に仏が現れたとき、そ  
こに群集した京童と仏の正体を見現した右大  
臣を合わせた姿がこの京童の二人である。登  
場する場が路傍であったとすれば、それはま  
だ説話の気分を残している設定なのだといえ  
るだろう。また二人にとって柿の木は自分の  
ものではないとすれば、盗んだと称して山伏  
を脅さなくてもよいことになる。表現に即し  
た読みと、素材面からの考察はここで整合一  
致するのである。こういう作業を全曲につい  
て行ってみることが課題となっている。

(文科大学教授)